

『徒然草句解』の注釈態度——巻之一を中心に

島内裕子¹⁾

要旨

本稿では、近世に出版された数ある徒然草の注釈書の中から、『徒然草句解』（一六六一一年刊）に焦点を当てて、この注釈書の特徴を明らかにするとともに、徒然草自体に内在する問題意識を掘り起こすことを目指す。

近世前期に刊行された各種の徒然草注釈書と『徒然草句解』を比較することによって、『徒然草句解』の注釈態度が、従来言われてきたような、儒学の立場からの注釈というよりは、むしろ『源氏物語』や『枕草子』や和歌などを通して、徒然草の本質に迫ろうとする傾向が顕著である事実を明らかにする。

また、『徒然草句解』は、数多くの箇所、徒然草の連続する章段間の照応に着眼する注釈を付けており、この点に『徒然草句解』の新しさと達成があると評価できる。

さらに、徒然草注釈書を、研究的な詳細なものと、読みやすさに力点を置いた一般向けの簡略なものに大別するならば、『徒然草句解』がその中間に位置すること、および、そのスタンスこそが、徒然草という作品を広範な読者たちに開くと同時に、徒然草の奥深い世界に分け入る道標となっていることを明らかにする。

はじめに

『徒然草句解』は、高階楊順が著した徒然草の注釈書で、七巻七冊からなる。寛文元年（一六六一）に刊行された。本稿が『徒然草句解』（以下、『句解』と略称する）に注目したのは、前稿『徒然草拾穂抄』の注釈態度——近世前期の徒然草注釈書を展望しながら¹⁾において、近世前期の徒然草注釈書を展望してゆく過程で、『句解』の注釈には、他の注釈書と比べて独自性があることが浮かび上がってきたからである。ただし、その時の研究テーマは、北村季吟が著した徒然草注釈書の特徴を考察することにあつたため、『句解』自体の詳しい研究は行えなかった。そこで本稿では、七巻七冊からなる『句解』のうち、巻之一（現行の第三十三段まで）を検討し、巻之二以後の注釈については、今後の課題として、今は、『句解』の注釈態度を考察する第一歩としたい。

考察の順序としては、最初にこれまでの『句解』に対する評言を概観し、つい

で『句解』の注釈の中から、『枕草子』と『源氏物語』に触れている箇所に注目する。さらに、『句解』の場合、徒然草の連続する章段同士の関連性に言及することが多いので、この点についても触れて、『句解』の注釈態度の特質と本質に迫りたい。

近世前期に刊行された各種の徒然草注釈書の中でも、独自性に富む『句解』の注釈を検討することは、徒然草自体の本質や、古典の注釈研究のあり方を考えるうえで、新たな示唆をもたらすであろう。また、『句解』の著者である高階楊順についても、その学問的背景をある程度明らかにできるのではないかと思う。

なお、『句解』は、現行の章段区分と多少異なるので、本稿では、『句解』に付いている章段番号は、すべて現行の章段番号に改めて論ずることにする。

一 徒然草注釈史における『句解』の位置づけと評価

『句解』の注釈態度を明らかにするにあたって、本稿で言及する各種の徒然草注釈書を掲げれば、以下の通りである。これらは、『句解』以前、および『句解』とほぼ同時代の注釈書、そして近世前期の徒然草注釈書を集大成したものである。

- ① 『徒然草寿命院抄』（秦宗巴・慶長九年・一六〇四年・二巻二冊）
- ② 『野槌』（林羅山・元和七年・一六二一年・十四巻十三冊）
- ③ 『鉄槌』（青木宗固・慶安元年・一六四八年・四巻四冊）
- ④ 『なぐさみ草』（松永貞徳・慶安五年・一六五二年・八巻八冊・挿絵入り）
- ⑤ 『徒然草古今抄』（大和田気求・万治元年・一六五八年・八巻八冊・挿絵入り）
- ⑥ 『徒然草抄（磐斎抄）』（加藤磐斎・寛文元年・一六六一一年・十三巻十三冊）

- ⑦『徒然草句解』（高階楊順・寛文元年・一六六一年・七卷七冊）
 ⑧『徒然草文段抄』（北村季吟・寛文七年・一六六七年・七卷七冊）
 ⑨『徒然草諸抄大成』（浅香山井・貞享五年・一六八八年・二十卷二十冊）⁽²⁾

最初に、①から⑨までの徒然草注釈書の流れを概観しておこう。①『寿命院抄』（一六〇四年）から、②『野槌』（一六二一年）を経て、③『鉄槌』（一六四八年）までは、比較的長い期間を置いて徒然草注釈書が刊行されていたのだが、『鉄槌』の数年後に④『なぐさみ草』（一六五二年）が刊行される頃から、わずかな間隔で次々に刊行されるようになったことは注目に価する。この現象は、日本文学における「蓄積」「集約」「浸透」というサイクルに、徒然草注釈書も当て嵌まることを示している。⁽³⁾

すなわち、①②③までの徒然草注釈書の蓄積を経て、それらの成果を集約する形で④以下の注釈書の編纂が可能となった。かくて、さまざまなスタイルの注釈書が幅広く刊行されている中から、読者は自分自身の興味にしたがって選択して、徒然草の世界に触れることができるようになった。それが広範な読者層を生み出し、近世における徒然草文化圏が各層へ浸透することにもなったと考える。

『文段抄』は、近世のみならず近代以降にも重要視される注釈書で、注釈という文化行為の大きなピークであった。その後も、『増補鉄槌』（山岡元隣・寛文九年・一六六九年・五巻六冊）、『徒然草諺解』（南部草寿・寛文九年・一六六九年・五巻五冊）、『徒然草大全』（高田宗賢・延宝六年・一六七八年・十三巻十三冊）、『徒然草参考』（恵空・延宝六年・一六七八年・八巻八冊）、『徒然草直解』（岡西惟中・貞享三年・一六八六年・十巻十冊・人名略伝と器物図）などが出現し、前記⑨『諸抄大成』で集大成された。

『文段抄』以下の注釈書は、さらなる集約を行いつつ、その集約された諸説の蓄積自体も増えてゆくのので、『大全』あたりから、巻数・冊数も膨大になり、二十巻・二十冊の『諸抄大成』がまとめられるに至るのである。

これらの注釈書類が次々に刊行された中であって、『句解』はどのような注釈書として位置づけられてきたのだろうか。『なぐさみ草』以後、十年と経たないうちに新たに刊行された三種類の注釈書に『句解』も入っている。けれども、『句解』は『文段抄』を分水嶺とする徒然草注釈書の潮流の中で、『文段抄』以前の注釈書のうち、従来、注目されることの少ない注釈書だった。

その理由はいくつか考えられるが、そもそも高階楊順という著者名は挙げられているが、この人物がどのような経歴を持ち、どのような学問的な基盤を有して

いたか、これまで具体的にはほとんど明らかにされておらず、『句解』の性格付けがしにくかったという面がある。しかも、『句解』以前に、それぞれに個性的な徒然草注釈書が六種類も刊行されており、『句解』は、諸説も含めてかなり詳しく注釈を付けているが、注釈する際に引用した先行する注釈書名が書かれていないので、『句解』自体の、いわば自前の注釈がどれくらいあるか、一見ただけでは抽出しにくい事情があった。けれども逆に、この点に新たな研究の可能性が発見できる。『句解』独自の注釈だけでなく、先行注釈書を踏襲したものも含めて考えた方が、『句解』の注釈態度はより一層明確になるからである。

従来、『句解』は儒教による価値判断で書かれているとされて、儒教的な徒然草注釈書と定義されてきた経緯がある。恵空の『徒然草参考』（一六七八年）の跋文に、『寿命院抄』以下の諸注に対する評言があり、この部分が、最初の徒然草の注釈史とみなされているのだが、『句解』については、「句解といふもの七巻を撰べり、これもむかしの抄をそのまま用ひて、其上に少し見解をくはへて、世にひろめたり」と述べる。『徒然草参考』は、さらに続けて『徒然草文段抄』を評した部分に、「猶も右之句解の中に発明せる儒書の引文をくはへてあつめ得たり」とある。つまり、恵空は、『句解』を、儒教の観点からの注釈が多い注釈書と認識している。

近代に入ってから、富倉徳次郎は「徒然草研究史通観」に、「楊順は経学の素養のあつた人であるが、徒然草の教誡の中心を儒教と見る立場に立つて、この『句解』を書いている。その意味で、当然『野槌』の説によることがきわめて多いが、作者はあまりにも儒教一筋に引き付けて、この草子の教誡性を説こうとしたために、むしろかたよつた見解の説も多い」と述べている。関場武も「『野槌』等の説にたよるところ多く、儒教一辺倒に徒然草を解釈している。『愚按するに』として自分の意見をのべているが、それもそれまでの注によるものが多い」とする⁽⁵⁾。これに対して、小林保治は『句解』について、「徒然草の原理を儒教であるとして、教訓の書とする。本文の間に二行割で注釈を加え、野槌・慰草の説をとりあげている。新説が目につくが、簡単明瞭で平明達意なことが特徴とされる」と書いている⁽⁶⁾。小林は、『句解』には新説があり、また、わかりやすく注釈していると述べており、やや『句解』の評価が高くなったように思われる。

以上、いずれも『句解』を儒教の観点からの注釈書として理解しており、そのことが定説化している様相を呈している。

『野槌』を引用する頻度の高さから見ても、『句解』が儒教的な観点を重視していることは確かであるが、それ以外に『枕草子』や『源氏物語』への言及の多さ

にも注目すべきではないだろうか。そのことは、『句解』の冒頭の総論のわずかな表現からも窺われる。

【句解】では、冒頭の総論で「詞つづきハ、大抵清紫二女より事おこりて、青き事藍より青く」と評している。『枕草子』と『源氏物語』の両書を基盤として徒然草が誕生したこと、および徒然草は、両書を超える「出藍の誉れ」であることとさへ絶賛していると受け取られる書き方である。この箇所は、徒然草注釈書の総論なので、徒然草に肩入れしたい心理の表れもあるが、実際に『句解』の注釈を見てゆくと、『枕草子』や『源氏物語』を徒然草の背景に置くことによって、徒然草自体から新たな光景を浮かび上がらせるという、徒然草の作品理解への深い洞察が垣間見られるのである。以下の考察で、まず『枕草子』と『源氏物語』を注釈に取り上げている箇所注目するゆえんである。

二 『枕草子』による『句解』の注釈

【句解】の注釈には、『枕草子』がしばしば使われている。このこと自体は、本稿で取り上げる比較対象である他の注釈書のうち、最初の『寿命院抄』が先鞭を付けており、『句解』が嚆矢ではない。『寿命院抄』の冒頭に掲げられている総論には、「草子ノ大体ハ、清少納言枕草子ヲ摸シ、多クハ、源氏物語ノ詞ヲ用」とある。二番目の『野槌』でも「此草紙の言葉大かた枕の草紙、源氏物語の体をうつせり」と述べている。『野槌』は『寿命院抄』の注釈を確実に前進させた詳細な徒然草注釈書である。けれども、『枕草子』の指摘に関しては、新たな発掘はほとんどない。

これに対して『句解』は、『寿命院抄』における『枕草子』からの引用箇所を踏襲するのみにとどまらず、新たな指摘もかなり加えている。以下に掲げるのは、『句解』巻之一から抽出した、『枕草子』との関連箇所である。なお、『句解』の本文を引用するにあたっては、適宜、清濁・句読点・送り仮名などを付し、意味を取りやすくするために漢字を宛てた箇所もある。

【第一段】「愚按ずるに、枕草子に夏ハよる、月の比はさらなり。」

ここでは、『徒然草』の「一の人の御有様はさらなり」の「さらなり」の用例として、有名な『枕草子』の冒頭部を例に挙げている。小さな言及であるが、このようなところにも『枕草子』を活用している。『寿命院抄』『野槌』を始め、『句解』以前の諸注に、この指摘はない。『諸抄大成』にも、この部分の『句解』

の解釈は掲載されていない。

【第八段】「枕草子に、心ときめきする物、よきたき物たきて独りふしたる、とあり。」

ここは、『徒然草』の「必ず心ときめきする物なり」の注釈である。既に『寿命院抄』に同様の指摘があり、『野槌』『鉄槌』『なぐさみ草』なども、ここを引用している。ただし、『磐斎抄』は、『枕草子』を挙げていない。『句解』は、このように、徒然草の当該箇所には直接『枕草子』の書名が言及されていないことも、『徒然草』の表現の背後に幅広く『枕草子』を重層させているので、『寿命院抄』の説に共感した結果だと思われる。

【第十段】「愚按ずるに、枕草子に、昔覚えてこと成る事なき、とあり。」

ここは、住まいの良し悪しを論ずる段である。室内の調度品の趣味について、『徒然草』が「昔覚えてやすらか成るこそ」心憎いと述べている部分の注釈である。第八段の注釈同様、『枕草子』の原文に『徒然草』と類似する表現が見えることを、「枕草子に」とあり」という書き方で、指摘している。『寿命院抄』『野槌』を始めとして、諸注に『枕草子』の指摘はないが、『諸抄大成』は、『句解』のこの注釈を引く。

【第十二段】「又按ずるに、枕草子につゆたがふ事なりけり、とあり。」

ここも、『徒然草』の「露たがはざらんと向ひゐたらんハ」の注釈として、『枕草子』の一節を挙げている。このようなごく短い表現にも注意して、『枕草子』との類似箇所を挙げているのは、『句解』の特徴である。この箇所、このような注を付けている注釈書は、『句解』以前にない。しかも、『諸抄大成』には、『句解』のこの部分は掲載されていない。単なる見落としか、それともあまりに微細な指摘と思ったためであろうか。

【第十六段】「愚按ずるに、枕草紙、歌ハといふ條に、かぐらうたもおかし、とあり。」

ここは、『徒然草』の「神楽こそ、艶めかし、面白けれ」の注釈である。『寿命院抄』『野槌』にも指摘はないが、『諸抄大成』は『句解』の指摘を、掲載している。

【第十八段】「愚按ずるに、枕草子に、心ゆく物の條に、いとかしがましき迄、人ごといふに、とあり。」

ここは、『徒然草』の「風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて」の部分の注釈である。『寿命院抄』『野槌』に、この指摘はないが、『諸抄大成』には、『句解』のこの部分が掲載されている。

【第十九段①】「愚按ずるに、枕草子、風ハといふ條に、野分の又の日こそいみじうあはれに覺ゆるとあり」

ここは、『徒然草』の「野分の朝こそ、をかしけれ」の注釈である。この部分に関して、『寿命院抄』『野槌』の指摘はない。『句解』が引用する『枕草子』の本文には「をかしけれ」が入っており、「能因本」の系統であろう。「三卷本」ではこの部分が「野分のまたの日こそ、いみじうあはれに、をかしけれ」となっていて、こちらの方が、『徒然草』の表現に近い。

【第十九段②】「源氏にハ幻の巻、枕草子にハ発端に四季の景をうつせり。又、木の花ハと云條の面影、よく相似たり。」

ここは、『徒然草』の「云いひつゝくれバ、皆、源氏物語・枕草子などに、ことふりにたれど」の注釈である。『句解』は、『源氏物語』と『枕草子』の両方の作品に触れるが、『枕草子』の記述は二箇所、挙げている。『寿命院抄』『野槌』には、この部分に関する記述はない。なお、『諸抄大成』ではこれと同じ注釈内容を『徒然草参考』の記述として挙げるが、『句解』のほうが早い時期の注釈書であるので、『句解』の記述として掲載すべきであろう。

【第十九段③】「枕草紙に、すさまじ物、しはすの月夜、おうなのけさう。」

ここは、『徒然草』の「すさまじきものにして、見る人もなき月の、さむけく澄める二十日あまりの空こそ、心ほそき物なれ」の注釈である。『句解』は、これに続けて『源氏物語』の朝顔巻も引いている。それについては次節で触れるが、『枕草子』のことは、『寿命院抄』『野槌』にすでに指摘がある。ただし、『枕草子』の本文で、このような記述が入っているものは見あたらず、『寿命院抄』が挙げる『源氏物語』の古注釈経由であろう。

【第十九段④】「愚按ずるに、枕草子、木ハと云條の、ゆづりはの下に、しハすの晦日にしも、時めきて、なき人のくぬ物にもしくにやと、あはれなるに、とあ

り。」

ここは、『徒然草』の「なき人のくる夜とて玉まつるわざハ」の注釈である。これは『寿命院抄』にも『野槌』にも指摘がなく、『句解』独自の注釈である。『諸抄大成』はこの『句解』の注釈を引いている。このような箇所を注釈に挙げているのは、『句解』が『枕草子』の表現に精通していることの証であろう。

以上が、『句解』巻之一（現行の『徒然草』第三十三段まで）における『枕草子』に基づいた注釈である。すでに『寿命院抄』で注釈に『枕草子』が使われ、それが『野槌』でも踏襲されているものもあるが、『句解』での独自の指摘もあった。それらの独自の指摘は、徒然草の表現が『枕草子』と類似している箇所では掲げられているのだが、『句解』の新たな指摘箇所は、『諸抄大成』に掲載される場合が多い。このことは、『句解』の指摘が決して強引なものではないことを示している。

以上が、『句解』の巻之一における『枕草子』の引用や言及である。

ところで、『寿命院抄』は、その冒頭部の解説で、徒然草は『源氏物語』や『枕草子』の表現を使っているとして述べているが、各段の注釈においても、『枕草子』と関連性がありそうな箇所を広範に挙げている。そして『寿命院抄』では第二十四段を、「此、枕草子ノ筆パウニテ書タルヤウ也」と評している。ただし、『枕草子』の引用に関して敏感な『句解』が、この点について触れていないのは、不審である。先には挙げなかったが、徒然草の本文では、第一段で早くも、「人には、木の端のやうに思はるるよと、清少納言が書けるも」という表現があり、『枕草子』と徒然草のつながりの深さを感じさせる。『寿命院抄』と『野槌』は、この表現の発展である『枕草子』から、該当する箇所を引用しているが、『句解』はそれに触れず、清少納言の経歴のみ、『野槌』からと思うが、引用する。

三 『源氏物語』による『句解』の注釈

前節で、『句解』における『枕草子』の引用・言及について考察したが、本節では、『句解』における『源氏物語』の引用・言及箇所を挙げてみたい。

【第一段①】「源氏・桐壺に、やん事なききはにあらぬが。『花鳥』に、やん事なきとは、極て上臆の品を云、とあり。無止と、かけり。」

ここは、「やんごとなき」の語釈で、『花鳥余情』における『源氏物語』桐壺巻の注釈を使って説明している。ほぼ同様の注釈が『寿命院抄』に書かれているが、より近いのは『野槌』である。「源氏・桐壺に、やんごとなき、はにはあらぬが。『花鳥余情』に、やむことなきとは、きはめて上臈のしなを云。無止と、書けり」とある。『句解』が引いている用例が、『寿命院抄』と『野槌』の両方に出ている場合に、両書ともに参看しつつも、『野槌』に拠ることが多いように感じられる。

【第一段②】「源氏に、まうの詞、多し。」

これは、傍若無人な言動をする法師に対して、兼好が「勢ひ猛に、ののしりたるにつけて、いみじとハみえず」と評している部分に付けた注釈で、「猛」という言葉が『源氏物語』によく出てくる言葉であることを指摘している。『源氏物語』全編によく通じていることを思わせる注の付け方である。『寿命院抄』にはこの指摘はない。ただし、第十九段のところで、「をさをさ」については、「源氏ニ多キ詞也」という指摘があり、同じ箇所注釈が『野槌』でも、「源氏物語に、多き詞なり。頗るといふ心也」という注釈が付いている。『句解』はあるいは、先行するこれらの注釈書の書き方に倣ったのか。

【第一段③】「品とハ、人の分限也。源氏・ハ、木々に、品と形と心とを論じて、心を本としたる面影をうつし」

これは、『徒然草』の第一段の「品・形こそ、生つきたらめ、心はなか、かしこきよりかしこきにも、うつさばうつらざらん」の部分の注釈で、帚木巻の「雨夜の品定め」を想起している。『句解』以前の注釈では、『寿命院抄』が、この部分の注釈で「品カタチコソ生レツキタラメ」という箇所を切り出して、「シナカタチト心ヲ評論シタル結句也。所詮、心ニ帰スル義也。源氏・ハ、キ木ニ、イマハタッ品ニモヨラジ、カタチヲバサラニモイハジ、イトクチヲシクネヂケガマシキヲボエダニナクバ、物マメヤカニシツカナル心ノヲモムキナランヨルペラゾ、ツキノタノミ所ニハ、ヲモヒヲクベカリケリ、トアリ」と、『源氏物語』の原文を長く引用している。

この部分を『野槌』では、『寿命院抄』と同じ帚木巻の原文を引用した後に、「しなとかたちと心とを論じて心を本とす」とまとめており、『句解』はこの表現を取り入れて注釈を付けたと思われる。このような『野槌』との類似性が、『句解』を儒教の立場からの注釈書として位置づけてきたことの原因となっているの

であろう。

【第五段】「愚按ずるに、此段、橋姫の巻、引き合せ見るべし。おそらくハ、兼好もこれに根ざして、その面影をうつしたり、と見えたり。橋姫にいハく、宮、世の中をかりそめのごとくおもひとり、いとはしき心の付き初むるも、身に愁ひある時、なべての世もうらめしう思ひしる物有りて、道心もおこるわざなるを、としわかく世中思ふにかなひ、何事もあかぬ事ハあらじと覚ゆる身の程に、さ、ハた、後の世をさへたどり知給ふらんが有難き。」

『徒然草』第五段は、ままたらぬ世に出家もせず静かに暮らすことを、むしろよしとする兼好の考えがよく表れている段である。この段に対する諸注は、『句解』以前のものでは、橋姫巻を挙げるものはなく、また、『句解』独自の注釈をよく拾い上げている『諸抄大成』にも、この箇所は書かれていない。それなのに『句解』は、おそらく兼好もこの橋姫巻の八の宮を心に思い浮かべてこのように書いたのだらうと推測している。他の注釈書が、徒然草に直接書かれている顕基中納言の故事自体に注釈しているのに対して、『句解』は一步踏み込んだ独自の注釈態度と言えよう。

【第九段】「帚木に、たまさか成る人共思たらず、と有り。」

これは、『徒然草』で、女性が自分の身を顧みないありさまを述べている部分に出てくる「思ひたらず」の注釈である。『寿命院抄』『野槌』を始めとして『源氏物語』の指摘はないが、『諸抄大成』では、『句解』のこの箇所を引いている。『枕草子』による注釈にも見られたが、『句解』は、ごく小さな徒然草の表現に対して、『枕草子』や『源氏物語』の用例を挙げており、それらは概して、他の注釈書では指摘されていない。『句解』の著者である高階楊順が、いかに細かな表現にいたるまで、王朝文学と照応させながら、注意深く『徒然草』を読み込んでいたかを示すものであろう。

【第十段①】「愚按ずるに、藤のうら葉に、さすがに、つきづきしからんをおぼすに、とあり。」

ここは、『徒然草』の第十段の冒頭「家居のつきづきしく」の注釈である。このような小さな表現に関わる箇所でも、その類例として『源氏物語』を持ち出すことは、他の注釈書に見えないが、『諸抄大成』では、この部分の『句解』の注釈を挙げている。

【第十段②】「すいがいの。すきがき也。透垣と書。すき間をあらせる垣也。愚按ずるに、未摘花に、すいがいの、たゞ少し、折れたる隠れのかたに立より給ふに、と有り。」

こは、「透垣」の語釈とともに、『源氏物語』未摘花巻の場面を引用する。このような注釈は、『寿命院抄』『野槌』にもなく、『句解』の独自性が出ている。『諸抄大成』には、この『句解』の注が掲載されている。

第十段にはこのように、①②の二箇所、用例を『源氏物語』から引いている。

【第十一段】「愚按ずるに、櫛巻にも、押し明がたの月影に、法師ばらの関伽奉るとて、からからと鳴らしつ、菊の花・濃き薄き紅葉など、折散し、と書たり。」

この部分に関して、『句解』以前の注釈書では『源氏物語』賢木巻の指摘はないが、『句解』と同年刊行の『磐斎抄』は、『句解』よりもさらに少し長く原文を引用して、次のような注釈を付けている。「きく・もみぢなど折ちらしたるとは。(中略) 源氏物語・さかきの巻に云。法師ばらあか奉るとて。からからとならしつ、菊の花こさうすきもみぢなど折ちらしたるも。はかなけれど。このかたのいとなみはつれづれならず後世はたたのもしげなり云々。是は源の雲林寺にゐ給ふときの事也」。

ここで注目されるのは、『磐斎抄』が『句解』よりも長い範囲で『源氏物語』の原文を引用したことによって、このあたりが、徒然草の第十七段に出てくる「山寺にかきこもりて、仏につかうまつこそ、つれづれもなく」の部分とも関連することがわかることである。ただし、『磐斎抄』は第十七段の注釈にこの部分を挙げていない。

一方、『句解』は、第十七段で、「愚按ずるに、櫛の巻に、此世もつれづれならず、後の世も、はた頼もし」という注釈を付けている。ちなみに、北村季吟の『文段抄』では、第十一段には賢木巻を挙げていないが、第十七段では挙げている。以上を整理すると、『句解』は賢木巻の一連の文章を第十一段と第十七段のそれぞれで、該当部分を示しているが、『磐斎抄』と『文段抄』は、どちらも片方の段にしか挙げていない。したがって、賢木巻の当該箇所と徒然草の関連性について、『句解』が最も強く注目していることがわかる。『句解』の注釈態度として、留意したい段である。

【第十二段】「愚按ずるに、紅葉の賀に、我も、うらなく打語り、なぐさめ聞てん物を、とあり。」

ここでは、『徒然草』の「うらなくなぐさまんこそ、うれしかるべきに」の部分の注釈として、『源氏物語』紅葉賀を引いている。『寿命院抄』『野槌』『磐斎抄』には、『源氏物語』への言及はない。『諸抄大成』には、『句解』のこの部分が挙げられている。

【第十九段①】「玉かづらに、いつしかとけしきだつ霞に、木のめも打けぶり。」

これは、『徒然草』の「花も、やうやうけしきだつほどこそあれ」の注釈である。『寿命院抄』『野槌』などにも見られず、『磐斎抄』『文段抄』にも指摘はない。『諸抄大成』ではこの『句解』の注釈を取り上げている。ただし、該当箇所は玉鬘巻ではなく、初音巻の有名な冒頭文である。『句解』の錯覚であろう。

【第十九段②】「明石に、春秋の花・紅葉のさかりなるよりハ、そこハかたなく茂れるかげどもなまめかしきに、水鶏の、うちた、きたるハ、たが門さしてと、あはれにおほゆ。」

【第十九段③】「夕顔巻に、彼白くさけるをなん夕顔と申侍る。花の名ハ人めきて、かうあやしき垣ねに咲侍ると申」

以上の②と③の二箇所は、『寿命院抄』『野槌』でも指摘されている。

【第十九段④】「朝顔の巻に、時々につけて人の心をうつすめる花・紅葉のさかりよりも、冬の夜のすめる月に雪のひかりあひたる空こそ、あやう色なき物の身にしてみても、此世の外のこと思ひながされ、面白さもあはれさも、のこらぬ折なれ。すさまじきためにいひをきけん人の心浅さよ、とて、みすまきあげさせ給ふ。」

こは、『徒然草』の「すさまじき物にして、見る人もなき、月のさむくすめる、二十日あまりの空こそ、心ほそき物なれ」という箇所、注釈である。『源氏物語』朝顔巻から、原文を長く引用している。この箇所は、『寿命院抄』がすでにこれと同じ一連の原文を引用し、さらに「アゲマキに、ヨノ人ノ、スサマジキコトニイフナルシハスノ月ヨノ、クモリナク、サシイデタルヲ」という総角巻も引用している。『野槌』は、『寿命院抄』の注釈を総角巻も含めて踏襲している。ただし、『句解』は総角巻の類似表現には、触れていない。

【第十九段⑤】「是より又、春に立帰るたる体を云。誠に、折節の移りかへると書出したるに、よく相応せり。女もじに書るも、男もじの文法にことならず。是を、常山の蛇の首尾、相救ふ、と云ふ。又、冬と秋との間に、源氏・枕草子の例を引きたるも、ゆるやかにして、つまらぬ筆法にて侍る。」

ここは『徒然草』の、「かくて明行く空のけしき」の注釈である。春から始まって、大晦日までを描く筆法が、首尾よく照応してすばらしく、しかも一段の間に『源氏物語』と『枕草子』を引き合いに出しながら、緩やかで窮屈でない書き方になっていると、この段の文章展開を賞賛している。ただし、この部分は、『野槌』の注釈をそのまま引用したものである。「常山の蛇」は『孫子』を踏まえている。「なぐさみ草」も『盤斎抄』も、同じこの『野槌』の注釈書を引用している。この『野槌』の注釈が、後の注釈者たちによほど共感されたからであろう。ある注釈が継承されてゆくには、注釈者による作品理解の深淺が大きくかわっていることを、如実に示す箇所であると思う。

第十九段は、徒然草の冒頭部分で最も長い充実した章段であり、近世の注釈者たちは、この段を高く評価する。その評価の原点には、この段が、『枕草子』や『源氏物語』や和歌を踏まえて書かれていることを注釈者たちがよく認識したからであろう。なお、『句解』のこの注釈に、「源氏・枕草子の例を引きたるも、ゆるやかにして」とあるので、ここに引いたが、第十九段全体の評価および、徒然草の中での照応にもかかわるので、この箇所についてはもう一度、章段間の照応の考察で取り上げたい。

【第二十四段】「源氏・さか木の巻に、野の宮の事を書きたり。其詞に曰、物はかなげ成る小柴がきを、おほかきにて、いたやども、あたりあたりに、いとかりそめ也。」

ここは、『徒然草』が、斎王のお住まいのありさまを「やさしく面白き事の限りなし」と書いている部分に対する注釈である。『寿命院抄』では、この前後を含めて、賢木巻の原文を、「秋ノ花ミナヲトロヘツ、」から「イトイミジウアハレニ心クルシ」まで、かなり長く引用している。また、『野槌』は、『句解』と同じ部分から始まるが、引用の終わりは『寿命院抄』と同じ所まで書いている。野宮の風情を示すためには、『寿命院抄』のように長く切り出すのが望ましいが、『句解』は、あまりに長大な引用と判断して、最小限にとどめたのではないだろうか。

『寿命院抄』で引用している範囲は、野宮を訪れる光源氏の視点の移動につれ

て、情景が目の前に広がってゆく名文であるが、徒然草のこの段では、あくまでも、斎宮の住まいを静止画面のように捉えている。したがって、そのことを『句解』が理解したうえで引用態度を示していると考えたい。

【第三十段①】「愚按ずるに、葵の巻に、あなかしこ、あだにといへば、とあり。」

ここでは、『徒然草』の「あなかしこ」という言葉の注釈として、『源氏物語』の用例を挙げている。ここまでも何度か見られた、『句解』における短い表現の挙例である。このような小さな注釈は、『寿命院抄』『野槌』などでは指摘しないことが多く、ここでもやはり『寿命院抄』『野槌』は、ともに『下学集』の解説を引用するにとどまり、『源氏物語』には触れない。『句解』は、『下学集』を最初に挙げたうえで、それに続けて、葵巻の用例を挙げている。『諸抄大成』には『句解』の注釈が挙げられている。

【第三十段②】「玉かづらに、年月へだ、りぬれど、あかざりし夕顔の露わすれ給はず。」

ここは、『徒然草』の、「年月へても、露わする、にはあらねど」の注釈である。

【第三十段③】「桐壺に、むなしき御からを、とあり。」

ここは、『徒然草』の「からハ」という言葉の注釈である。以上の②と③の二箇所は小さな用例指摘であるが、この②と③の用例はどちらも、『寿命院抄』『野槌』でも挙げられている。

以上のことも考え合わせながら、ここで、『句解』巻之一における『枕草子』と『源氏物語』の引用や言及について、まとめておこう。他の注釈書の場合もそうなのだが、『句解』においても、注釈の付け方は、大別すると二つのスタイルがある。すなわち、徒然草の原文を短く切り出して語釈のように付ける注釈と、徒然草の文章の特徴や、章段の展開とからめて、文脈を大きく捉えて付ける注釈の二つである。

後者については次節で考察するが、ここまで指摘してきた『枕草子』や『源氏物語』による注釈は、表現の類似性に着目する語釈的なものが多かった。その際に、すでに『寿命院抄』や『野槌』に挙げられているものを、そのまま踏襲した箇所もある。しかし、それ以外に、先行注釈書では挙げられていない箇所も多か

った。『句解』が指摘していた箇所は、『寿命院抄』や『野槌』では見過ごされていた箇所を『句解』が新たに発見したのだと考えたい。なぜならば、『寿命院抄』で指摘しているごく短い表現の用例と、『句解』が指摘したごく短い表現の用例には、特に区別すべき軽重の差は見られないからである。

四 『句解』における、連続する章段間の照応の指摘

次に、『句解』の注釈における章段間の照応の指摘について、具体例を挙げながら考察したい。

【序段】「又按ずるに、下の下戸ならぬといふ迄を序文とし、いにしへの聖の御代と云を本段の初として、下心ハ、源氏・品さだめの例になぞらへ、序に人品を論じて、帝王の事を初にいひたれば、又、本段の初にも聖代の事より書出し、末々の事も処々引き合せ見る一説有り。是も又、捨てがたき義也。」

ここは、現行の序段末尾に書かれている注釈で、『源氏物語』帚木巻の、いわゆる「雨夜の品定め」を持ち出しているもので、前節に挙げた『源氏物語』による注釈の項に入れてもよいのだが、徒然草の原文における連続する二つの章段のつながりについて述べているものとして、ここに挙げた。『句解』も第一段で、「源氏・は、木々に、品と形と心とを論じて、心を本としたる面影をうつし」と書いていることはすでに紹介した。

短い語句の出典を指摘する注釈ではなくて、現行の序段・第一段をひとまとめにして把握したうえで、第二段との照応に注意を喚起している。こうなると語釈の範囲を超えて、大きな視野で徒然草の文章展開と段落構成を捉えていることになる。章段のつながり方に注意を払うのが『句解』の読み方であり、それが早くも序段から提示されているのである。ちなみに、この部分の『句解』の注釈は、『諸抄大成』に掲載されている。

『句解』では多くの場合、各段の末尾に章段間の照応に触れるコメントを書き記している。このことは、『句解』の注釈態度の大きな特徴と考えてよいであろう。たとえば、第二段では、「上に、御門の御位はいともかしこしとばかり書き捨てて、今此段にとりわきて、ねんごろに天下を治め給ふ大事を書き出せる詞簡にして心切なり」と論じて、第一段と第二段とのつながりを指摘している。第六段でも、「上両段に、人間の落ち着きは、とかく出家遁世と云ひすまし、又此段にては世間の上に立ち返り」というように、第四段から第六段までを連続的に

捉えている。このような読み方が、特に顕著になってくるのが、第十五段「いづくにもあれ、暫し旅立ちたるこそ」あたりからであるので、順次詳しく見てゆきたい。

【第十五段】「此段ハ、十三段（現行の第十二段）の、世に心友のなき事を歎じたるより、上の両段に、詩文・歌道の事をいひ、扱此段、次の両段まで、人、風流・洒落に心をうつし、あながち人に対せず共、独り楽しむべきさまを書たり。十四段（現行の第十三段）より下の十八段（現行の第十七段）までの心ハ、皆、十三段の心を張本として、書つゝけたる也。」

これは、第十五段（いづくにもあれ、暫し旅立ちたるこそ）の末尾に書かれている注釈である。現行の第十二段から第十七段までが、相互に関連する内容を持つことを読み取り、前後の章段のつながりについて、詳しく解説している。『句解』独自の大局的な読み方が示されている。『諸抄大成』にこの部分が載せられていないのは、『句解』の説が注目されなかつたのであろうか。けれども、これほど詳細に、章段の展開を把握して解説しているのは、『句解』の注釈態度の特徴として留意してよいだろう。

【第十八段】「上の段には、世をはかなみ、後世をねがふことを云ひ、此段には、それをうち返して、世にまじはるにつけても如かくのごとく此有べきことといふ心なり。さて、発端よりいみじかるべきと云まで、世に有て身を修むる干要（＝肝要）、よく云ひおほせたり。儒門の理にも違ふべからず。次に、許由・孫農を上の詞の証例に引き、末には異朝上代のすぐれたる事をほめ、本朝当世の風俗衰薄せることを歎息したるなり。」

これも、第十八段の主旨を述べるにあたり、第十七段を引き合いに出して論じているところに、『句解』の独自性が感じられる。

【第十九段】「けしきたつといひ、散過ぬといひて、花の盛をいはずして、それとしらせたる、奇妙の文法也。下巻の発端の句のころ、引合、見るべし。」

ここは、「花も、やうやうけしきだつほどこそあれ、折しも、雨・風うちつづきて、心あはただしく散過ぎぬ」という部分の書き方を捉えて、第百三十七段の冒頭部「花は盛りに」と遠く響き合わせているのである。「奇妙の文法」という言葉を使って、第十九段のこのあたりの書き方を賞賛している。『句解』の特徴である章段照応の指摘の中でも、とりわけ注目される、大きな眺望であると言

えよう。

ちなみに、『壽命院抄』と『野槌』には、第十九段と第百三十七段との照応は書かれていない。ただし、『なぐさみ草』の第十九段の「大意」にはこの段のすばらしさを、『源氏物語』のような作品さへ書けるほどの筆の勢いであり、「奇妙とも、中々にこそ侍れ」とあることが思い合わされる。また、『句解』より以後の注釈書であるが、北村季吟の『文段抄』でも、「花もやうやうけしきだつとハ、咲くべきけしきに色めき立つ心也。ここに花の盛りを書かざる事は、兼好の例の筆法也」とあるのは、『句解』と同様の捉え方である。『なぐさみ草』『文段抄』という松永貞徳・北村季吟師弟のことを思うと、あるいは、『句解』の著者である高階楊順も貞門の人である可能性もあろうか。ここ一箇所からは特定できないにしても、貞門に通じる文学観が感じられる。『磐斎抄』は、第十九段を直前の第十八段と照応させて、「四季転変のありさまが、賢人のための楽しみとなるよし也」と、解説する。

注釈者たちは作品自体に導かれて、新たな、そしてより深い読みを実現できる。むしろその作品自体が、それを欲して、待ち受けていたのだといってもよいだろう。そういう文学の力を、『句解』が感じ取っていると思う。

【第二十四段】「此段ハ、上の段に、禁裏の事をいへるにうけて、斎王の野の宮におはします事にうつり、それよりすべて、神社の事をおかしく、書つらね、さて又、次段に、仏閣の体を述、末ハ皆無常に観じ侍る。」

ここは第二十四段の注釈であるが、それ以前の第二十二段・第二十三段で、宮中の言葉遣いや建物・部屋などの名前のことが書かれているのを受けて、第二十四段は野宮や神社のことを書き連ね、次の第二十五段では寺院の荒廢から無常の認識に至るといふ、徒然草の文章展開を大きく捉えている。

【第二十五段】「此段ハ、上の段に神社の事をいへるに付て、又、仏閣のさたにうつり、何事も世の無常なる事を、人にいましめ侍り。」

ここは、前段の末尾と同様、前後のつながりを書いており、表現自体は、やや類似した書き方であるが、このように、逐次、章段間の照応に注意を喚起しているところに、『句解』の読み方の特徴がよく表れている。

【第二十六段】「又按ずるに、上の段には、当世と後世とのうつりかハる事をいひ、此段にハ、当世のうちにして、人の心のあすか川成体を述たり。猶又、『古

今』ノ恋のうたに『心こそうたてにくけれ染ざらばうつろふ事もおしからましや』とよめる心、よく考へ合見るべし。又按ずるに、此段、初には生別の体を述、中間に、上を証すべき故事を引、又、終に生別をよめるうたを書のせられたる、よく古文の格に似侍る。先ハ、『大学』の伝文を見るに、経を釈して詞つき、理あまれる時には国書を引、詩を引。誠に、『離騷』を学びて『離騷』ならざる類成べし。」

ここは、『句解』の注釈の独自性が、よく表れている。『徒然草』第二十六段の末尾の注釈である。第二十五段が、現在と過去の推移を述べているのに対して、ここでは、現在の中での人間の心の推移を書いているとして、前後の章段の照応を明らかにする。と同時に、この章段内部での細かい展開にも注意を払って、最初に恋心の変化・消滅を述べ、次にそのことを裏付けるような墨子・楊朱の故事を挙げ、さらに最後で再び「此の世の外」になってしまった恋の思い出を詠んだ歌を書いているという、徒然草の文章構成とその展開を実に詳細に分析し、さらに中国の文学論にも言及している。

この最後の部分を読むと、この注釈は、林羅山の『野槌』の引用かと見紛うが、そうではない。『野槌』には、今引用したような注釈は付いていない。『句解』以前の注釈書にも、同時代の『盤斎抄』にも書かれていない、ここは、『句解』独自の考察なのである。

ところで、『句解』と『野槌』の注釈の関連性については、確かに強いものがあり、『句解』は『野槌』の漢籍に関する注釈をかなり取り入れている。『野槌』の注釈に出てくる資料名で『居家必用』については、今回の考察範囲には出てこなかったが、『句解』卷之二には『居家必用』が活用されている。『居家必用』は中国の元の時代にまとめられた日用百科とも称すべき本で、この本の我が国への流入については明確な研究が行われていないが、近世初期に野間静軒を中心とする知識人グループの間で、読まれ始めたといふ。

【第二十八段】「上の段にハ、天子の御位につき給ふ事をいひ、此段には、かくれ給ふ事をいふ。物盛にしてハ衰の心にて、人の始終をかみせしめんため成べし。」

ここでも、前段と当段との照応に触れ、「始め終わり」に注目している。ここでは直接書いていないが、徒然草下巻の冒頭である第百三十七段に、「万の事も、始め終はりこそ、をかしけれ」とあることと、響き合わせてのことであろう。『句解』らしい自在な読み方である。

【第三十一段】「愚按するに、此段、上の段に無跡なごあとのことを云に付て、兼好が身の上に当りたる事を、次の段と両段に書たり。誠に、かりそめの上にてもよき一言ハ、耳に当りて、死後にも忘れぬ物也と、人の心得にかゝれたると見えたり。又、兼好がこのめる、例の風流・洒落成べし。」

この段の末尾に記されている、『句解』独自の注釈である。『諸抄大成』にも引かれているが、「又、兼好がこのめる、例の風流・洒落成べし」の部分はカットされている。

【第三十二段】「上の段は、無き人の嘉言をいひ、此段ハ、無き人の善行を思ひ出し書り。誠に、言行は車輪の両輪にて、嘉言ある者ハ善行あるべきことはなり也。これをよむもの、只、言葉のみたくみにしてその行跡のみにくきを、尤もつゝしむべき事、しらしめん為成べし。」

ここは、第三十二段末尾の注釈である。直前の段との照応を示唆している。

【第三十三段】「前の両段に、人の言行のいみじき事を書きのせ、此段にハ、人の才智のすぐれたる事をほめたり。誠に、初段の内に先、人の言葉をつゝしむべきさまをいひ、次に、品と形とところとの三つを論じて、心に決定し、又、其上に才智を加へて、人の全美といへるに、よく相応し侍り。大かた、此書の始終、如此、心を付て見るべき物也。」

ここは、この段の末尾に書かれている注釈である。と同時に、ここで述べているのは、徒然草の冒頭部と、第三十一段・第三十二段・第三十三段の連続する三章段との相似形である。このような徒然草の展開を大きく把握する読み方が、『句解』の特徴であり、そのことが、巻之一の末尾でもあるこの注釈で、明確に指し示されているのである。

以上、『句解』巻之一における章段間の照応に触れる注釈を抽出しながら、分析を施してきた。この作業によって、『句解』が、いかに徒然草の前後の章段を関連づけて読み込んでいるかが明らかになったのではないかと思う。『句解』におけるこのような読み方に対する批判もあるが、章段間の照応をどのように読み込んでゆくかは、現代のわたしたちにとっても、心に留めるべき視点であり、そのことを明らかに指し示しているのが『句解』であると言えよう。

おわりに

『句解』の注釈態度を、巻之一という一つの窓から垣間見てみた。七巻七冊のうちの第一巻だけではあったが、ここに早くも『句解』の独自性は横溢しているように思う。章段間の照応については、『磐斎抄』における「来意」ということが、指摘されて久しいが、『句解』でも同様の読み方がされていた。『磐斎抄』と『句解』は刊行年が同じで、わずかに刊行月で『磐斎抄』が先行している。両者の影響関係の有無は、明確にはわからないし、偶然の一致かもしれない。だが、徒然草注釈書の蓄積とともに、寛文元年（一六六一）という時期が、新しい徒然草の読み方を生み出す時代になっていたとすれば、その背景も含めてさらなる考究が必要だろう。

また、徒然草の背後に『枕草子』や『源氏物語』の表現とその作品世界を深く読み取る『句解』の姿勢もまた、大いに示唆的である。『句解』は、決して儒学者の立場一辺倒の注釈書ではない。すぐれて文学的な徒然草の読み方を提起した注釈書である。本稿では巻之一を取り上げただけであったが、巻之二以降の詳しい研究とともに、徒然草に限らず、「作品の読み方の変遷」を注釈書から明らかにしてゆく視点の重要性を再認識して、今回の研究を締め括りたい。

注

- (1) 『放送大学研究年報』第三十号、平成二十四年。なお、この他に、徒然草注釈書に関する拙稿として、以下の二編がある。『徒然草寿命院抄』の注釈書態度（『放送大学研究年報』第十六号、平成十年）。「徒然草古注釈書の方法——『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」（『放送大学研究年報』第十八号、平成十二年）。

- (2) 本稿で主として取り上げる注釈書は以下の諸本によった。また、参照した先行研究もここに掲げた。

・『徒然草寿命院抄』

川瀬一馬解説『徒然草寿命院抄』（松雲堂書店、昭和六年）

吉澤貞人著『徒然草古註釋大成』（勉誠社、平成八年）

・『野槌』

『野槌』（無刊記、上八巻・下六巻）

吉澤貞人著『徒然草古註釋大成』（勉誠社、平成八年）

・『鉄槌』

『徒然草鉄槌』（無刊記、江戸通油町 山形屋利平開板、四巻二冊）

- 小松操「徒然草」鉄槌考略」(『金沢文庫研究』九五号、一九六三年一月)
- ・『なぐさみ草』
- 吉澤貞人著『徒然草古註釋大成』(勉誠社、平成八年)
- ・『徒然草古今抄』
- 『徒然草古今抄』(万治元年、大和田久左衛門、八冊)早稲田大学古典籍総合データベースによる写真版
- 小松操「徒然草古今抄」と草子類の朗読」(『金沢文庫研究』八七号、一九六三年二月)
- ・『徒然草抄』
- 有吉保編・加藤磐斎古注釈書集成3『長明方丈記抄・徒然草抄』(新典社、昭和六十年)の影印本
- 吉澤貞人「加藤磐斎著『徒然草抄』―巻第一―の翻刻―」(金城学院大学)
- 吉澤貞人「加藤磐斎著『徒然草抄』―巻第二―翻刻」(金城学院大学)
- ・『徒然草句解』
- 『徒然草句解』(寛文五年孟秋吉祥日 風月庄左衛門開板、七巻七冊)
- ・『徒然草文段抄』
- 北村季吟古註釋集成18『徒然草文段鈔上』(新典社、昭和五十四年)の影印本。
- (3) 日本文学における、「蓄積」「集約」「浸透」というサイクルについては、拙著『日本文学概論』(放送大学教育振興会、二〇一三年)で詳しく論じた。また、『週刊 新発見! 日本の歴史』通巻十四号「平安時代2」(朝日新聞出版、二〇一三年一〇月六日発行)所収の拙稿「二〇〇〇年歴史絵巻14 文学」でも、日本文学を貫く特徴的な展開として述べた。
- (4) 『増補』『国語国文学研究史大成8 枕草子 徒然草』(三省堂、昭和五十二年、ただし初版は昭和三十五年)所収「研究史通観」の近世の概説参照。
- (5) 『徒然草の影響・享受と研究史——近世前期を中心に』(『国文学 解釈と鑑賞』昭和四十五年三月)の注15参照。
- (6) 『徒然草事典』(有精堂、昭和五十二年)所収の「注釈書・研究書解題」参照。
- (7) 注1で挙げた拙稿のうち、「徒然草古注釈書の方法——『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」で述べた。
- (8) 第十九段と和歌のかかわりについては、注1拙稿「『徒然草拾穂抄』の注釈態度——近世前期の徒然草注釈書を展望しながら」で触れた。
- (9) 『居家必用』については、田中ちた子・田中初夫編『家政学文献集成續編 江戸期Ⅶ』(渡辺書店、昭和四十四年)参照。なお、『居家必用』は、現代のエッセイの中でも言及されることがある。南條竹則『中華料理秘話 泥鰌地獄と龍虎鳳』(ちくま文庫、二〇一三年)に、魚と羊を使った料理の項で、「醸焼魚」が『居家必要事類全集』から引かれていた。
- (10) 安良岡康作『徒然草全注釈 上下』(角川書店、昭和四十二年、四十三年)では、『句解』の注釈に触れる箇所がかなりあるが、章段間の照応については、賛同する箇所もあれば、牽強付会であるとする箇所もある。ただし私見では、今回の考察範囲に

おける、『句解』の説はほぼ妥当と思われた。

(11) 西尾実「随筆の特性と研究方法の問題——『つれづれ草磐斎抄』における来意の考察」(『つれづれ草文学の世界』所収、法政大学出版局、一九七二年、新装版第一刷発行)参照。

(12) 『磐斎抄』には、寛文元年九月の刊記のものと、同年十一月の刊記のものがある。一方、『句解』は、寛文元年十二月である。

(二〇一三年十月三十日受理)

The Method of *Tsurezuregusa-kuge* as a Commentary

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

Tsurezuregusa-kuge (徒然草句解、1661) is one of the numerous commentaries on *Tsurezuregusa* (徒然草) published in the modern period. This paper focuses on this work in the hope of illustrating its characteristics as a commentary as well as discovering some problems which exist in *Tsurezuregusa* itself.

This paper compares *Tsurezuregusa-kuge* with its predecessors and makes the following points clear.

Firstly, although it has been regarded as a commentary from Confucian view-points, *Tsurezuregusa-kuge* in reality tries to approach *Tsurezuregusa* through the study of *Genji-Monogatari* and *Makuranososhi* and tankas.

Secondly, *Tsurezuregusa-kuge* in many passages turns its attention to correspondences between chapters of *Tsurezuregusa*. This can be estimated as a new feature and accomplishment of *Tsurezuregusa-kuge*.

Thirdly, if we divide commentaries on *Tsurezuregusa* into two kinds, that is, detailed academic study and brief introductory work, *Tsurezuregusa-kuge* stands between those two. By taking such a stance, it introduces *Tsurezuregusa* to general readers, offering at the same time a milestone for the students of the profound world of *Tsurezuregusa*.